2006,8,7

平成18年度公開研修講座（夏季）「障害幼児教育」

コミュニケーションを促す方法

総合教育センター
特別支援教育室

Ⅰ　コミュニケーションについて

１　コミュニケーションの二重性

コミュニケーションについて考えてみるために、今日、わたしたちが人とどのようなコミュニケーションをしたのかを思い出してみましょう。

①「はやくおきて！」　②「おはよう」　③「歯を磨いて」　④「いいてんきだね」
⑤「ごみだししてね」　⑥「また一週間が始まるな」　⑦「醤油とって」
⑧「今日も暑いね」　⑨「わすれものない？」　⑩「いってきまーす」

上記の会話は、どれも日常の普通のやり取りですが、以下のように分類することができます。

A

①「はやくおきて！」　③「歯を磨いて」
⑤「ごみだししてね」　⑦「醤油とって」
⑨「わすれものない？」

相手に指示・命令・要求し、質問する働きかけで、発話することによって相手を動かし、実際的で日常生活にとって必要で、明確な目的を持つ発話行為

他者を自己の目的の手段とする
要求伝達系

B

②「おはよう」　④「いいてんきだね」
⑥「また一週間が始まるな」
⑧「今日も暑いね」⑩「いってきまーす」

挨拶したり、目の前で起こっていることを相手に知らせたりして叙述し、相手の気持ちに添ってかかわり、信頼をもって会話すること自体が目的となる発話行為

他者とかかわること自体が目的となる
相互伝達系

このように、わたしたちのコミュニケーションは、大きく二つに分けることが出来ます。しかし、Ａのような会話ばかりであるなら、ものごとは処理されていくけれどもストレスがたまり、Ｂのような会話だけでは、心情的には満たされるものの物事が進まないといった事態になるのでしょう。つまり、手段となり、目的となる他者との関係の二重構造に私たちのコミュニケーションは依存しており、そのことが、人間のコミュニケーションを豊かに、また奥行きのあるものにしています。

ところで、自閉的な傾向のある子どもたちは、どちらかというとＢのコミュニケーションが苦手といわれています。また、ダウン症の子どもはＡのコミュニケーションが比較的苦手といわれています。

発達に遅れのある子どもたちは、私たちが当たり前だと思っているコミュニケーションの二重構造のバランスが崩れがちで、そのことがコミュニケーションにさまざまな支障をもたらし、ことばの獲得を遅らせる重要な要因と考えられるようになってきました。

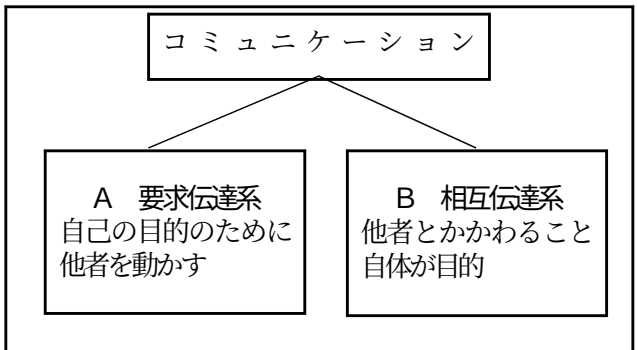


図１　コミュニケーションの二重性

コミュニケーションの二重構造性は乳幼児期のことばの出現以前からの前言語的なコミュニケーションの発達の中に認められ、他者とのかかわりとし、さらにことばの意味や構文の獲得の基盤を形づくっていると考えられます。

具体的な例

乳児期　要求伝達系―生理的欲求（空腹、排泄）を泣いて示す
　　相互伝達系―生後すぐ、微笑みかけると笑う
１歳前　要求伝達系―ほしいものに手を伸ばし、母親を見て要求
　　相互伝達系―「ちょうだい」と大人が言うと持っていたものを手渡すなどのやり取り遊びを楽しむ

表１　２歳までのコミュニケーション行為の発達

	要求伝達行為の発達	相互伝達行為の発達
0歳～1歳まで	Ⅰ　生理的欲求　0～3ヶ月 ＜泣き：オナカガスイタ＞ （人に対する期待の芽生え） Ⅱ　伝達対象物の明確化　4～5ヶ月 ＜対象物に手を伸ばす：アレ、トッテ＞ （追視、リーチング） Ⅲ　伝達相手の明確化　6～8ヶ月 ＜母親を注視し手を伸ばす：ママ、アレトッテ＞ （リフトハンド：大人の腕を引っ張る） Ⅳ　伝達行為の間接化　9～12ヶ月 ＜対象に指さし＋母親注視＋発声：ママ、アレトッテ＞	Ⅰ　働きかけへの応答　0～3ヶ月 大　人：泣き →子ども：応じて笑う Ⅱ　自発的な働きかけの発生　4～6ヶ月 子ども：大人を見て「アーアー」 →大　人：「なーに?」 Ⅲ　相互性の獲得　7～9,5ヶ月 ボールのやり取り Ⅳ　手渡し行動(giving)の成立　9,5ヶ～12月 持っていたものを大人に差し出す
1歳～1歳半まで	・　物・ジェスチャーを伴ってことばで要求 ・　自己主張・拒否 ・　指さし使用の機能分化※	・　物や出来事を他者に知らせる叙述や報告 ・　自分の行為や心的状態の叙述や報告 ・　他者の行為についての叙述の始まり ・　大人との相互あそび ・　他児への関心とかかわり
1歳半～2歳まで	・　他者への行為の要求 ・　自己主張・拒否 ・　所有への欲求 ・　共同行為ルーティンへの参加の要求 ・　ことばで感情をコントロールできる ・　二語文で要求	・　他者の行為を二語文で叙述 ・　他児への興味 ・　誘いかけ ・　相互あそび ・　自己・他者の意識化 ・　過去や未来の非現前事象への言及

※指さしの機能

行為の要求
窓から外を見ていました。窓から離れると、もっとみていたいというかのように窓を指さしました。

知らせる(叙述)
抱っこされた子どもが「わんわん」といって指さししました。振り返ると犬がいました。

「あった」(存在)
お散歩の途中、花、葉っぱ、虫、犬などを指さししていました。

応答、非現前
絵本を見ています。「もうもうは？」と聞くと「アッタ」と指さしました。（応答の指さし）
「わんわんは？」と聞くと、絵本にはなく、さっと上を向き、壁に張ってあるポスターの犬を指さしました。（非現前の指差し）

2　記号としてのことば

通常、ことばは音声で伝えられますが、１歳前後からは一般的な意味を持った、しかし恣意的な「記号」として用いることが可能になってきます。「記号」として用いるには二通りの側面があります。相手からの記号の使用を理解する側面「音声言語理解」と、自分から記号として相手に向けて使用する側面「音声言語表出」です。

表２　２歳までのコミュニケーションの記号としての二側面の定義と発達

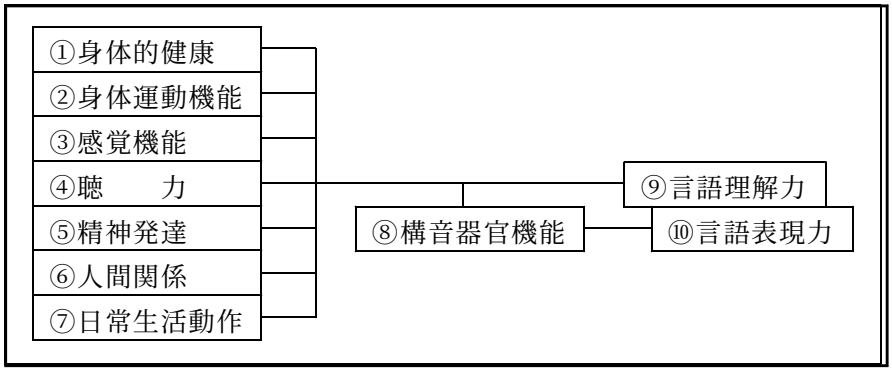
	月齢(ヶ月)	記号的伝達構造	
		音声言語理解	音声言語表出
定義		ジェスチャーも含めた言語の理解	発声も含めた言語の表出
発達	0 6 12 18 24	・ジェスチャー、文脈を伴ったことばの理解 ⇓ ・日常的な指示理解 ⇓ ・物、身体部位、人の名称の理解 ・動作やルーティンの理解 ⇓ ・絵や写真による物の名称の理解 ・二語文の理解	・/a:/ /e:/等の発声 ⇓ ・喃語 ・音声模倣 ・有意味語 ⇓ <1歳前半> 名詞　1～10語程度 動詞　1～5語程度 形容詞その他　1～5語程度 ⇓ <1歳後半>　<18～20ヶ月>→　<20～24ヶ月> 名詞　20～30語　→　100語程度 動詞　10語　→　50語程度 形容詞その他　10語　→　50語程度 ・二語文の使用 ・助詞の使用

Ⅱ　ことばの発達を支える要因

ことばの発達を促すための指導は、対症療法の「音声ことば」の指導だけで効果が上がるものではありません。ことばの発達を支える土台をつくらなければ（育てなければ）ことばの発達は期待されないからです。

次の図は、ことばの発達とそれにかかわる要因との関係を示したものです。この図を簡単に説明すると、子どもの①身体的健康、②身体運動機能、③感覚機能、④聴力、⑤精神発達、⑥人間関係、⑦日常生活動作、⑧構音器官の機能が一定のレベルまで育つと、それが⑨言語理解力や⑩言語表現力の豊かさとなって現れることを示しています。

これら１０局面のいずれに欠陥があっても子どもは「ことばの遅れ」を起こすことになるのです。また、これらの局面は相互に関連し合い、助け合ったり、逆に生み出したりしているのです。



☆　ことばの発達を支える要因と「ことばに遅れ」がある子が示す特徴

1　身体的健康

・健康面に問題があれば、運動量が少なく、遊びの種類も制限され、経験や学習の範囲がせばまる

2　身体運動機能

（身体知覚との関連―身体の地図のことで、自分の身体の各部分がどこにあって、どのように動かせばどんな動きになるかを把握する力のことです）

・歩、走、跳の運動などの動きがギクシャクしていて、なめらかさに欠ける
・手足の動きが不自然な感じがする
・スキップが苦手
・ボール運動が苦手
・指先を使う動作が苦手
・縄跳びが苦手

3　感覚機能

（空間認知との関連―物の位置関係を理解する能力のことで、上下、左右、前後、東西南北、遠近、縦横等を把握する力のことです）

・鏡文字をよく書く
・靴の左右がなかなかわからない
・絵を描く時クレヨンを上手にぬれない
・形の把握ができない
・たびたび迷子になる

4　聴　　力

・呼びかけても、気がつかないでいる
・こちらの言ったことばを正しく復唱できない

5　精神発達

・具体物と数との対応が難しい
・仲間との協調が難しい
・注意の集中が難しい
・言葉が遅れ、発音も不明瞭になりがち
・抽象的な思考が苦手である

6　人間関係

・ひとりぼっちになりがち
・人前に出たがらない
・見慣れぬ人の前で、緊張しがち
・けんかが多い
・幼い子との遊びが多い

7　日常生活動作

・生活習慣がなかなかつきにくい

8　構音器官

・強く吹いたり弱く吹いたりすることが不得意
・舌や唇の動きがぎこちない
・よだれが出やすい
・ごはんがよくかめない
・声の息が続かない

9　言語理解力

・話しかけに対する反応が弱い
・指示に従った行動ができにくい
・トンチンカンな返事をすることが多い
・絵本などにあまり興味を示さない

１０　言語表現力

・指さし行動が不十分
・話せることばの数が少ない
・ことばが幼い
・口数が少ない
・話し方がたどたどしい
・一語文、二語文が多い
・つなぎことば（て、に、を、は）や、形容詞の使用が少ない

Ⅲ　知的障害児のことばの発達を促す援助の実際

1　ラポートづくり

子どもと保育者の親しい関係をつくる。

①　身体接触　　(例　おんぶ、肩車、すもう、一輪車、トランポリン、すべり台)

②　ゲーム<簡単なルールのもの>(例　かけっこ、ままごと、ボールころがし、わなげ、じゃんけん、おにごっこ、かくれんぼ、トランプ、カルタ遊び)

③　遊び　　(例　お絵かき、ねんど遊び、おりがみ、水遊び、ブロック、積み木)

2　人間関係づくり

遊びを通して、相手の人と気持ちを伝え合いたいという要求意識や意欲を高める。

人の話をよく聞いたり、いっしょに歌ったりする態度を養う。

①　遊び　　(例　上記の③)

②　読み聞かせ　　(例　絵本、紙芝居)

③　歌　　(例　童謡)

3　身体運動機能

全身運動を高める。手指の巧緻性を高める。

①　全身の運動　　(例　輪とび、輪くぐり、ボール運動、なわとび)

②　手指の運動　　(例　ちぎり絵、豆つかみ、おはじき、お手玉、ねんど遊び)

4　視知覚機能

視知覚能力を高める。視覚記銘力を高める。

①　遊び　　(例　パズル、積み木、ブロック、はり絵、トランプ)

5　聴覚機能

①　音やことばに対する聴覚的認知力を高める　　(例　音あて、動物の鳴き声遊び、音さがし)

②　一つ一つの語音をよく聞き、文字表記する力をつける　　(例　ききとり<聴写>)

③　聴覚－音声の協応を図る　　(例　復唱)

④　聴覚－運動の協応を図る　　(例　ききとり<聴写>、カルタ遊び)

6　ことばの発達を促す指導

子どもがことばを習得する時の習性にのっとり、ことばを育てるのに有利な環境の中で、愛情豊かに、ことばを教えるという意識をもって、子どもがことばを使いたくなるように接していきます。子どもの知的な発達相応に言語能力を獲得できるようにします。

それには、ことばの発達の遅れを引き起こしている要因や遅れの程度に応じて、個々の子供のニーズに合わせた指導がなされなければならないのです。

①　言語理解力促進指導

(a) 絵カードとり　　(b) ジェスチャー　　(d) 読み聞かせ

②　言語表現力促進指導

(a) ごっこ遊び　　(b) カルタ遊び　　(c) 自由会話

7　日常での大人のことばがけ

日常会話の中で、次のようなことを意識しながら会話をします。

①　ミラリング・・・子どもの行動をそのまま真似る

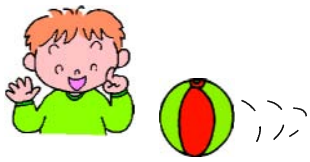
積み木で遊んでいた子供が、急に両手をあげてバンザーイの格好をしました。何も意味がわからないけれど、大人もとりあえずバンザーイのポーズを真似てみます。

大人が「なーによ、それ」と言ったら、がっかりするけれど、まねしてもらうとうれしいのです。この人は反応があっておもしろいから、また、やってみようと思います。お話ししてみようとする気持ちの始まりです。

②　モニタリング・・・子供の出す声や音をそのまま真似る

ボールを転がします。「ああっ！」と、子どもはびっくりしたように言います。「ウゴイタ！コロガッタ！」という意味でしょうか。

そのとき、大人も「ああっ！」と、同じ口調で言ってあげます。子どもにとってはなんでも、一つ一つが新しい発見。喜びに満ちた発見に付き合ってあげましょう。



③　パラレル・トーク・・・子どもの行動や気持ちをかわりにことばに表す

自転車の前の座席に子供を乗せて走っていたら、ガタンとなりました。子どもはちょっとびっくりしたように、からだを固くします。「うわっ、ガタンした。びっくりしたね。」

子どもの気持ちをことばに出して言ってあげると、すぐに安心します。安心できることは、とても大事なことです。

④　セルフ・トーク・・・大人が自分の行動や気持ちを口に出して言う

お弁当を食べ終わって「ああおいしかった」。プールに入って「ああ気持ちいい」。ピアノの伴奏楽譜がない「あれ？どこにしまったかなー？」

自分の気持ちや行動を声に出して言って、ことばにして伝えます。

⑤　リフレクティング・・・子どもの間違いをさりげなく正しく言い直して返す

カラスを見つけた子どもが「ア、タアチュ！」それに「ほんとだ、カラス！」と応えます。 子どもは発音を直されるのではなく「さりげなく」「正しい発音を聞く」ことができました。

お兄ちゃんが煎餅を食べているのを見つけた、けんちゃん。「けんがア、けんがア」と追っかけます.「けんちゃんもほしいの？」って言ってあげると「けんもオ」と言い直します。

⑥　エクスパンション・・・ことばの意味や文法をひろげて返す

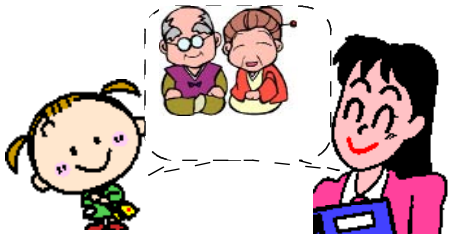
「あ、ワンワン」という子どものことばを「あ、ワンワンだ。白いワンワンだね。」と「白い」をひろげて返します。

「おちょと、おちょと」と言ったときに「お外、行きたいね。お外行きたいね。お外行こうね。ちょっと待ってね。」と言います。

⑦　モデリング・・・子どもに会話のモデルを示す

さかんに「ジイジ、チワ、ジイジ、チワ」って言っています。「おじいちゃんの家に行こうね」「おじいちゃんに、こんにちはしようね」と、正しい文章にして聞かせてあげましょう。

それを聞きながらだんだん、文章の構造がわかってきます。



Ⅳ　自閉児のことばの発達を促す援助の実際

1　自閉児のコミュニケーションに関する課題

自閉児の多くは、その特性から、話しことばの活用に困難性があり、他者と円滑にコミュニケーションを取ることが難しいことが多いです。日本語では、「ことば」には２つの意味があります。表出される「音声ことば」(speech)と、思考などを伴う「言語」(language)、その両方を意味する「ことば」(word)が、同じ「ことば」という語で一般的に用いられています。２種類の「ことば」のうち、(speech)は習得してもコミュニケーションの手段として使うことができなく、(language)の習得が難しいのです。ほかの発達に比べ「ことば」の発達だけが劣る子もいます。

特徴として、オウム返し（エコラリア)、繰り返しのことば（同じ質問や気に入ったコマーシャルをくり返し話す)、人称代名詞の逆転、抑揚のない話し方、身ぶりなどの非言語的能力の活用の困難さなどがあげられます。このような自閉児のコミュニケーションの課題をまとめると、以下のようになります。

① 話しことばを使用したコミュニケーション（意思伝達）の困難さ
② 表情や身ぶりなどの非言語的コミュニケーション使用の困難さ
③ 楽しみや成し遂げたものを他者と共有し、共感することの困難さ
④ 発達水準に合った遊びや仲間関係づくりの困難さ
⑤ 常同的で限定的な興味の集中
⑥ 常同的で反復的な行動上の問題
⑦ オウム返し（エコラリア）が多い。

オウム返しについて
即時エコラリア：すぐオウム返しをする場合
遅延エコラリア：時間をおいて口まねが出る場合（ＣＭをつぶやく、同じことを何度もつぶやくなど）どう反応したらよいかを学習していない質問や指示に対して、出やすい。

2　自閉児へのコミュニケーションの実際

①　子どもが「話しかけたい」と思う存在になる

コミュニケーションの基本です。「話しかけたい、話してもいい、かかわりたい」という気持ちを育てるためにラポート（信頼関係づくり）をしっかりと取ります。

②　要求行動に着目する

子どもは、日常生活の中で必ず何らかの要求や指示を発しています。まずは、保育者がそれを見逃さず、着目することが大事です。そして、その要求行動をまずは理解し、その行動を言語化（ことばで表現）または、ことば以外のコミュニケーション手段について、意味をもって使えるように援助する必要があります。

具体例
・「おもちゃを取ってほしい（リフトハンド、クレーン現象：ほしいもののところに手を持っていく)」
・「～を取ってください」という言い方を教え、言ったら取ってあげる
・サインや身ぶりなどを教えその行動をしたら取ってあげる

③　身ぶり、道具、絵カード、写真などを使って言語化

自閉児は、耳からの情報だけでは、理解できない場合があるので、視覚的な手段「道具、絵カード、写真等」を使い、それを提示しながら会話します。その時は、必ず視覚的に提示すると同時に、「話しことば」でも提示し、聴覚と視覚の連合を図るようにします。

④　自己選択、自己決定

保育者からの指示を理解させるだけでなく、できるだけ自分で選ばせるようにし、表出の手段を身に付けさせます。

具体例

・ブランコで遊ぶことがすき。いつも遊ぶからと言って、すぐブランコに連れて行かない
・「ブランコ」「すべり台」などの絵カードを見せながら、「どっち？」と聞く
・「ブランコ」のカードを選んだら、ブランコで遊ばせるようにする（話しことばで言える場合はことばで言ってから）

⑤　活動や動きを通して

自閉児は、「絵で表せない」ことばの理解が難しいと言われます。活動や動きを通して身体部位の各称、方向・位置関係、比較に関することば、動きに関することばなどを教えます。

具体例

・音楽や音階に合わせ、小さい姿勢から徐々に大きい姿勢に移行。
・模倣遊びなどでぞうさん（大きい）、ありさん（小さい）などをイメージして動きながら「大きい」「小さい」のことばの指導
・アブラハムの子（身体部位）

⑥　対人関係や社会性を育てるために

自閉児はグループでの活動、集団での活動が苦手なことが多いが、道具を使うなどの配慮をしながら、少しずつグループ活動ができるように援助していく。

具体例

・手をつなぐことが嫌な子。道具などを媒介して保育者や他の子どもとふれあうようにする
・ロープ、布、フラフープ、パラシュートなど（一緒に活動した経験を増やす）

⑦　その子にあったコミュニケーションの手段

音声としての「ことば」があることより、他者との「やりとり」がある方が大事です。「話しことば」があるからと言って、「話しことば」を表出させることにこだわらず、どんな手段でもいいから自分の思いを表出させることをねらいとします。そのためには、その子に合った手段を保育者もするようにこころがけます。

具体例

・身ぶりでの表出が多い子。保育者もボディランゲージをたくさん使い、子どもが身ぶりでの表出がさらに増えるようにする。何らかの手段を使って「伝えることは得なこと」という気持ちをもたせる

Ⅴ　構音器官の機能を高める訓練について（発音面）

1　構音器官の機能訓練の目的

発音面に関わる機能訓練の目的は，障害音の構音学習にとって必要な構音器官（口唇，舌，口蓋，顎等）の運動　機能や運動調節機能を高めることです。

この機能訓練は，障害音と構音器官の運動との関係を考察して，運動機能に問題の目立つ部位について行います

2　機能訓練の内容

構音器官の機能訓練
- 1　呼吸・発声訓練
- 2　吹く訓練
- 3　吸う訓練
- 4　顎の運動
- 5　口唇の運動
- 6　舌の運動
- 7　軟口蓋の運動
- 8　その他

※　（　）内は出典。

1　呼吸・発声訓練

発声器官，呼吸器官の協調運動や調節機能を高める。
発声の持続時間を伸ばす。

(1) いろいろな呼吸をしてみよう（難聴･言語障害児の指導計画）
- ・口を閉じて鼻から息を吸って，鼻から息を出す。
- ・口を閉じて鼻から息を吸って，口から息を出す。
- ・口から息を吸って，鼻から息を出す（口を閉じて・口を開けて）。
- ・口から息を吸って，口から息を出す。

(2) 「ア」の発声をいろいろやってみよう（難聴･言語障害児の指導計画）

(3) 母音発声（難聴･言語障害児の指導計画）

2　吹く訓練

鼻咽腔閉鎖機能を増し，呼気を随意的に調節する機能を高める。

(1) ピンポン玉吹き台（難聴･言語障害児の指導計画）
- ①吹くものを変える･･････ピンポン球，発泡スチロール球，スポンジ球等
- ②吹き方を変える･･････強く吹く，弱く吹く
- ③角度を変える

(2) ろうそく吹き台（難聴･言語障害児の指導計画）
- ①吹き消す
- ②ストロー吹き
- ③ゆらゆら吹き

(3) 吹くおもちゃ(難聴･言語障害児の指導計画)････････風船，巻き笛，シャボン玉等
風船ガム(障害児指導ガイドブック)

(4) 吹く楽器（難聴･言語障害児の指導計画）････････ハーモニカ，ヘビ笛，ハト笛等

(5) ストロー遊び（難聴･言語障害児の指導計画）
- ①ブクブク遊び
- ②粉吹き
- ③袋吹き
- ④吹き絵

(6) 風船遊び（遊びと教具）

(7) 吹いてみよう(難聴･言語障害児の指導計画)･････････紙ヨット,吹き矢,発泡スチロール球,羽毛等

(8)ストロー吹き
①［ｓ］音を導くための練習(難聴･言語障害児の指導計画)････結果として正しい音が出るような動作から導き出す方法
②クルクル風車（構音障害の指導技法Ｐ 132）
③ロケット飛ばし（構音障害の指導技法Ｐ 132）

3　吸う訓練

鼻咽腔閉鎖機能を増し，吸気を随意的に調節する機能を高める。

(1) ストローさかなつり（難聴･言語障害児の指導計画）

(2) ストローで飲もう（難聴･言語障害児の指導計画）

(3) 皿から

(4) 口で････････紙，セロハン紙等

(5) すすって食べる練習（構音障害の指導技法Ｐ 216）････････うどん，そば等

4　顎の運動

顎を動かす筋肉を強め，その動きを調節する機能を高める。

(1) 口を開けよう（難聴･言語障害児の指導計画）

(2) かみましょう(難聴･言語障害児の指導計画)････････するめ,ガム,グミ,せんべい等

(3) ガクガク体操（難聴･言語障害児の指導計画）

5　口唇の運動

口唇を動かす筋肉を強め，その動きを調節する機能を高める。

(1) 口のじゃんけん（難聴･言語障害児の指導計画）

(2) 百面相あそび（難聴･言語障害児の指導計画）

(3) ウイウイ体操（難聴･言語障害児の指導計画）

(4) 音なしあてっこ（難聴･言語障害児の指導計画）

(5) アオウあそび（難聴･言語障害児の指導計画）

(6) タコタコあそび（難聴･言語障害児の指導計画）

(7) 口の体操
①唇を出して引っ込める
②唇を縮めて前方に突き出す
③口を広く開けしっかりと閉じる
④歯茎が見えるように上唇を上げて唇を閉じる

(8) 口の体操

①唇の動きを滑らかにする練習
②パパマ表による練習
③バブリングによる練習・・・・・・プ，ブ，ム

(9) わっかゲーム（乳幼児の教育Ｐ22）
①こよりのわっかわたし
②わゴムわたし

6　舌の運動

舌を動かす筋肉を強め，その動きを調節する機能を高める。

(1) 舌の体操(難聴･言語障害児の指導計画)(構音障害児の指導技法)
①舌先を両口角に交互につける。
②舌先を上唇と下唇に交互につける。
③舌先で上唇から下唇へなめまわす。
④舌先を上(奥)歯茎につける
⑤舌先を上(奥)歯茎と下(奥)歯茎に交互につける。
⑥舌を出して，舌をU字形にする。
⑦舌を出したり引っ込めたりする
⑧前舌部にくぼみをつくって，舌を出す。
⑨前舌部にくぼみをつくって，舌を出し入れする。
⑩前舌部にくぼみをつくって，下前歯裏につける。

(2) 舌のじゃんけん（難聴･言語障害児の指導計画）

(3) レロレロ体操（難聴･言語障害児の指導計画）

(4) 皿なめ（難聴･言語障害児の指導計画）

(5) ボーロつぶし

(6) 舌打ち遊び

(7) ボーロのせ

(8) 発声うがい

(9) チョコレートなめ

(10)ペロペロキャンディー

7　軟口蓋の運動

軟口蓋の運動を促進し，鼻咽腔閉鎖機能を高める。

(1) 発声うがい（難聴･言語障害児の指導計画）

＊前述、吹く訓練，吸う訓練により，鼻咽腔閉鎖機能を高めることができる。

8　その他

(1) ほっぺたのたいこ
①ふくらましてポン
②ゆびではじいてポン

(2) かおじゃんけん（乳幼児の教育Ｐ28）

《引用・参考文献》

「コミュニケーションの発達と指導プログラム」　長崎勤・小野里美帆共著　日本文化科学社

「言語発達遅滞児の治療教育」　柚木馥・鈴木克明編著　学苑社

「言語障害教育」　谷俊治・小村欣司・吉岡博英
聴覚・言語障害児教育関係教官連絡会議編　日本文化科学社

「幼児の『言葉遊び』」　松井公男著　明治図書刊

「ことばの指導ハンドブック（発達の遅れと教育別冊）」
全日本特殊教育研究連盟　日本文化科学社

「新ことばのない子のことばの指導」　津田望著　学習研究社

「自閉児指導のすべて」　全日本特殊教育研究連盟　日本文化科学社

「コミュニケーションを育てる自立活動」　小林芳文・是枝喜代治編著　明治図書

「インリアル・アプローチ」　竹田契一・里見恵子編著　日本文化科学社

「診断とことばの相談」　中川信子著　ぶどう社

「ことばをはぐくむ」　中川信子 著　ぶどう社

月刊　特別支援教育研究４月号（2006）
特集「特別支援教育の重点事項」　日本文化科学社

「乳幼児の教育　－顔・指・手・足・体あそび－　第１６号　芸術教育研究所編」　黎明書房

「口作り・口遊び」　東京都江東区立南陽小学校ことばの教室 編

「用語集 －構音障害編－ （研究紀要第１６号）」　岩手県難聴言語障害教育研究会

「難聴・言語障害児の指導計画 －改訂版－（研究紀要第１８号）」　岩手県難聴言語障害教育研究会

「構音障害の指導技法」　湧 井 豊 著　学 苑 社